

日時：令和6年9月5日（木）18：30～20：30

場所：恵庭市民会館中ホール

1. 開会

○恵庭市・原田市長（挨拶）

- ・まちづくりワークショップや分野別での意見交換会、中学生に対するアンケート、出前授業等で総合計画の策定作業を進めているところ。
- ・小磯先生には現在の第5期総合計画においても、携わっていただいている。現在、センター長をされている北海道文教大学地域創造研究センターで恵庭市と連携しながら恵庭市の持つ課題解決に尽力いただいている。
- ・市民の皆さまの力によって、恵庭市が形作られて、そして住み良いまちになっているが、今後、令和8年からの10年間の恵庭のまちの将来を決める極めて重要な総合計画になるため、皆さまには様々な場面でお声をあげていただきたい。

2. 基調講演

○地域政策の新たな潮流と総合計画の意義―文化創造都市への挑戦―

小磯 修二氏（北海道文教大学地域創造研究センター長）

3. パネルディスカッション

○「地域の魅力と特性 地域資源の再発見」

- ・モデレーター：小磯 修二氏
- ・パネリスト：原田 裕（恵庭市長）
落合 信也さん（恵み野商店会 会長）
唯一無二のてつしさん（まちづくりワークショップ委員）
白崎 亜紀子さん（恵庭市民）

4. 閉会

○基調講演

・本日は、3つの視点、①総合計画の意義とその役割、②地域をめぐる潮流の変化に我々はどうのように向き合っていけばいいのか、③文化創造都市に向けての提案、からお話したい。

1. 総合計画の意義、その役割

・総合計画の意義としては、まずどのようなまちを目指すのか、共通の目標を共有し合うことが大きな役割だ。それが前向きに活動を進めていく地域の力を生み出す。そのための羅針盤としての役割が総合計画にある。

・次に「総合」の意義は、既存の縦割り構造をどのように横糸でつないでいくかだ。行政の施策全体を調整するところに総合計画の意義がある。どういう恵庭の地域づくりを進めていくのか、それに向けて行政内部で連携し、みんなでつくることが大事。

また、地方自治体のトップの意思、選挙公約の政策を総合計画という形で政策に落とし込んでいくという関係も大事。これらが、うまく密接に結びつくと、総合計画の取組みの実現性が高まっていく。

・さらに総合計画の意義として長期的な政策指針の意義がある。自治体の予算は単年度予算だが、安定的な政策を進めていくときには、この予算システムはある意味で限界がある。魅力ある地域づくりを進めていくときには、長期的な視野での長期的な政策の物差しが必要であり、それが総合計画。総合計画をつくることによって、安定的な政策という持続可能な仕組みづくりとなる。これらが総合計画の意義である。

・計画づくりは地域の力を醸成していく非常に大事なチャンスであり、そこを意識して計画づくりを進めていくことが重要。そのための市民参加（パブリック・インボルブメント）、市民の皆さん方が計画づくりに前向きに参加していくというのは大事なプロセス。

その中で、6つのポイントがある。

一点目は、何か意見ありませんか、など一方的に聞くということではなくて、我々はどういう恵庭のまちづくりをしたい、それに対してどう思いますかという形で、何を達成したいのかを分かりやすく明確にしていくことが大事。

二点目は、一回限り、ただ市民の意見を聞くというようなやり方ではなく、市民の関与の過程を複数置く、それにより市民の側からも政策に関与している、自分たちの政策だという意

識が深まっていく。

三点目は、対象者別に照準を当てた住民参加を心がけていく。ヴォーカルマイノリティやサイレントマジョリティという言葉があるが、関心を抱くことでサイレントからヴォーカルに変わってくる。こういうプロセスが大事。

四点目は、関心のレベルに応じた参加機会として、積極的に参加したい方へどういう対応をするのか、時間のない方であればスマホでアンケートに答えてもらうなど、手法の工夫が必要。

五点目は、政策決定の実感。総合計画を住民参加の下で市民の皆さんと一緒に作っていくことで共有感が醸成され、安定した計画づくりにつながっていく。

六点目は、内部の連携。企画部門だけで作った計画ではなく、行政全体の部署の参画が大事で、「皆でつくった計画」により総合計画の力が発揮される。

- ・ここで市民参加の大切さについて、私が経験した事例をお話したい。中央アジアにあるキルギスでの総合計画の策定に関わったことがある。キルギスにはイシクル湖という美しい湖があり旧ソ連の崩壊により非常に経済的に疲弊していたので、イシクル湖周辺に観光リゾートをベースにした新しい総合開発を推進していこうというプロジェクトが日本政府の肝いりで始まり、その総合開発計画監理委員会の委員長としてお手伝いをした。旧ソ連時代にはいろいろな計画が策定されていたが、すべてモスクワから指示されて、こうあるべきだという机上で作った理念上の計画であった。そこで、我々は戦略環境アセスメントという思い切った住民参加手法を提案した。旧ソ連の計画経済思想の中で、新しい市場経済における計画をつくるためにこういう手法も非常に大事だという思いで、思い切った住民参加の手法を取り込みながら2か年かけて計画を作った。

残念ながら直後にチューリップ革命というのが起こり、結果的に計画は幻に終わった。

しかし、計画は幻に終わったが、住民参加の呼びかけに応じて参加していた方々が、政権が変わっても地道に取り組みを続けていて、イシクル湖周辺での一村一品活動につながり、今は世界でも非常に注目される取り組みになっている。計画策定時の住民参加の手法は生きていたのだ。この成功の鍵は女性の力だ。貧しい国にとっては、一村一品のような形で少しの収入があるだけでも出稼ぎを防ぎ、家族と一緒に生活ができるというモチベーションにつ

ながるのだ。2018年に訪問した時には100を超える産品づくりの会社がイシクル湖周辺にあったが、そこには計画づくりの時にワークショップに参加してくれた方がいた。計画づくりの中に住民参加という手法を用いたことが結果的に地域の力を高め、世界に誇る一村一品運動につながったのだ。

計画づくりにおける市民参加については、市民のモチベーションを高めていく契機にしてほしいという思いで、私の経験をお話した。

2. 地域をめぐる潮流の変化

- ・地域をめぐる潮流の変化にどう向き合っていくのかという点では、人口減少、長寿命化の時代にどのように総合計画を描いていくのかが、難しいが一番大事な部分。

戦後長く計画手法は人口増が目標だったが、それは、人口が増える時代に作られてきただけに楽な目標でもあった。これからは人口が減る時代であり、そこでどういう目標で政策を進めていくのかというのは大変難しいが、しっかり考えていく必要がある。

人口が減るということは経済需要が縮小していくことだ。経済需要とは消費と投資だ。人々がお金を消費し、民間企業が投資する。それが、人口が減ると縮小していくのだが、実はもっと怖いのが、将来への不安からさらに消費や投資が委縮していくという負のスパイラルが起きることだ。そのような意識が結果的に多くのマイナスをもたらす時代になるという自覚を持つ必要がある。そこに将来に向けて不安を払しょくする可能性を示す、地域経済政策の視点での総合計画の役割が大事だと感じている。

- ・地域の経済は開放的である。人口減少時代には、より多く外から稼ぐという意識をもって取組を進めていくということが必要になる。また、稼いだお金を外になるべく漏らさないで、域内循環力を強化させていくことを意識しながら都市政策を進めていくことが大事になってくる。もちろん外発力と内発力の融合が大切だが、内発的に取り組むことが一層重要であり、そのためには足元の地域経済、地域産業の実態を科学的に分析して戦略を立てていく必要がある。

- ・令和2年度ベースの産業連関表と平成17年度の産業連関表を比較するとこの15年間で恵

庭の域際収支は赤字が増えている。また、自給率は北海道全体に比べて低く、平成17年度と比べても自給率が下がっていて域内の連関力は低い。さらに恵庭は通過型の産業が多くなっているのが特徴。しっかり稼ぐ産業に力を入れていく必要があるだろう。

稼ぐ産業としては観光に目を向ける必要がある。大切なのは、多くの人に来てもらうことが政策の目的ではなく、恵庭市内での観光消費を高めながら、サービス移出産業として、地域産業政策として進めていくことだ。

すでに北海道では、インバウンドを含め道外からの観光消費額は8,000億円くらいで、農業生産額は3,000億円程度なので、すでに地域の基幹産業として北海道経済を支えている実態がある。

もう一つは、稼いだお金を地域の中でしっかり循環させていくこと。域内での連携により、地域経済力を高めていくことで、恵庭の市民力、官民連携の力強さというものを生かしていくことが大切。

- ・また、雇用環境の変化、人手不足など雇用政策に恵庭市としてどう向き合っていくかという議論が必要。

雇用政策はマッチングであり、これからは働き手と雇い手のきめ細かい情報は地域に密着した自治体に関わっていく必要があるだろう。

経済安全保障による産業の地方立地の流れがあり、ラピダスにより国際水準の海外の方々が、北海道、恵庭周辺に来る。どう向き合い、どう受け止めるかはこれからの大きなテーマになり、国際的なレベルの方たちが住みたくなる魅力ある環境を提供していくことは恵庭市にとって大事な戦略。

3 恵庭が輝くために、文化創造都市への挑戦

- ・地域創造研究センターでは、「文化創造都市プロジェクト」を進めている。地域資源をあらためて文化資源として再認識し、評価することにより、先駆的な都市政策を展開していくという挑戦であり、恵庭市はそれを実現するフィールドとしての可能性と適性があると感じている。

京都大学の藤田先生の言葉に、「捨てればゴミ、使えば資源」がある。足元にある潜在的な地域資源を発掘することが大切だ。

例えば、恵庭の下水終末処理場、生ごみ・し尿処理場、ごみ焼却施設の連携は宝だと思う。下水処理と廃棄物処理を連携させて、またごみの分別処理によって、下水汚泥を混合処理してバイオガスを発生させている。そして、そのガスで発電をしている。迷惑施設を時代を先取りした再生可能エネルギーの循環システムとして実現しているのが恵庭。このような取り組みを地域の資源、魅力、宝として認識する力、それが地域の力だ。この取り組みは国交省の循環のみち下水道賞のグランプリをとっているが、すでに文化資源として評価されている。このように見れば、いろいろな取り組みの可能性があると思う。

- ・我が国では文化政策の潮流に大きな変化がある。今までは文化・芸術というのは守るもの、しっかりと維持していくものだったが、今は観光や国際交流、福祉など幅広い政策との連携で見つめなおしていこうという動きがある。
- ・東京大学の小林真理先生からは、地域の人たちが、すばらしい地域資源に気づくことによって、地域の力が高まり、それが新たな文化政策につながるというお話があった。また、青森県八戸市には八戸ブックセンターがあり、本の文化を探り、発信していく拠点となっている。八戸市は文化創造都市政策を進めており、その原点は総合計画である。市長が変わっても総合計画における文化創造都市政策は継続して進められてきている。箱物もけっこうあるが、柔軟な活用、生かす工夫により時代変化にしっかり向き合っている点は恵庭にとってもヒントになると思う。
- ・恵庭にはすばらしいカリンバ遺跡がある。さらに、恵庭といえば読書のまちで、読書文化条例は2013年に定められている。こうした政策の伝統をどのような形で将来に向けて持続的な政策につなげていくのが大事。現在恵庭まちじゅう図書館という恵庭らしい取り組みをさらに発展させていくための調査をしている。恵庭らしい政策を文化資源として再評価していく作業も大切だと感じる。
- ・カリンバ遺跡のように素晴らしい資源を生かしていく文化政策もあれば、独自の政策をさらに磨きをかけて、恵庭の宝にしていくことも大事。
- ・ヨーロッパは地域政策、都市政策に非常に力を入れている。基本的な考え方は結束、多様性、包摂の3つがキーワード。不透明な時代における都市問題の解決には創造的な発想が必要。創造的な発想による政策展開には行政の内部だけでは限界があり、住民の方が自由な発想で

地域資源を見つめ直していくことが大切。総合計画の策定にあたって、内発的な力を醸成していくきっかけにしていきたいと思う。

○パネルディスカッション

(落合 信也さん(恵み野商店会 会長))

- ・イベント活動の中で住んでいる人たちの声が大きいというか、主張が強いと感じている。こういうまちにしていきたい、こういうことをやってみたいというのをすごく感じる。花でまちをきれいにしたいという方たちが、活動をしていて、バトンをどこかで引き継いだというふうな感覚を持っている。世代交代に差し掛かっていると、まちを綺麗にしていく活動として、花を植えるだけではなくて、除草作業等はみんなで行っていかなければならないが、高齢化して、次の世代にというふうになったときは、やっぱり花等のキーワードのもとに、地域の住民がコミュニケーションを取りながら、次につなげていくまちをつくっていく活動のどこか一つに参加できているかなというふうに今回の講演を聞いて感じた。

(唯一無二のでつしさん(まちづくりワークショップ委員))

- ・恵庭市に対するネガティブな要素が少なかった。東京の三鷹に30年住んで、恵庭に来る1年前から移住先を探した。市民の声でまちができていて、みんなでまちづくりに取り組む。未来に対して明るいと感じた。移住としては、北海道はまず3都市にしばった上で、移住体験ツアーに参加したことが一番の決め手となった。

(白崎 亜紀子さん(恵庭市民))

- ・10年前ここに座ったときには、10年後どうなっているかなというのを考えたときに、多分子育てのことを基本的に考えながらここでお話ししたと思うのですが、まさか10年後というのは全然違っていた。市民活動を通して、環境の変化もある。

(モデレーター 小磯 修二 氏)

- ・今日の我々のテーマである恵庭の資源再発見について、恵庭の魅力として強く感じているこ

と、恵庭のこれからの可能性について具体的にお聞きしたい。

(落合 信也さん(恵み野商店会 会長))

- ・ 普段のまち並み、きれいな住宅、商店街のまち並み、住んでいると当たり前だが、たくさんの人が協力しながら続けている。それが魅力である。商店街のイベントを行ったり、花火大会をやったりということが子供たちの思い出になるのでないかなというふうにすごく感じてやっている。子供たちが大きくなって、大学や就職、都会のほうに行ったときに、その恵庭のよさというものを、ここを出たときにすごく感じるのではないかなというふうに思っている。

(モデレーター 小磯 修二 氏)

- ・ 恵庭は住みやすいと言われる。暮らしやすさというのは感じにくいところでもあるが、そこをいい意味で自覚しているのは、やっぱりすごい魅力なのだなと思う。そういう意識づけみたいなのがあることによって、さらに魅力を高めているのが恵庭の特徴かなと感じる。

(唯一無二のてつしさん(まちづくりワークショップ委員))

- ・ 市民の方々も、大きくここはだめだというのが特にない。先ほどおっしゃっていたように、それが魅力なのですけれども、その魅力を発信する方法というか、何かありきたりな言葉になってしまっているというか、住み心地がいいからおいでよ、空気がおいしいし、山があって川があって、買物もできるし大丈夫、安心して住めるよ。そういういわゆる住んだ人だから分かる魅力というものを観光、人を呼び込む上で、抽象度を具現化する。今後10年間で高めて、最終的には、ああ恵庭ってそれだよねっていうまちになっていたらすごい魅力的だなとは思った。

(モデレーター 小磯 修二 氏)

- ・ 先ほどの観光の話につながるが、恵庭というまちが経済的にもしっかりと安定した強いまちにしていく、ただ住みやすさだけではなくて、その住みやすい恵庭の魅力を経済的な価値に

していく、いい意味での戦略的な発想、議論も必要ではないか。

(白崎 亜紀子さん(恵庭市民))

- ・活動をやってみようと思ったときに、最初に何から始めていいか分からなかったが、やってみたら方法があった、市民活動の方法も手段はあったけど、使い方がわからなかった。市民活動を、やりやすい環境というのが様々あるが、うまく使える、もっと浸透するようなそういうものが広がっていくといいなというふうに思った。現在は、市民活動が楽しくて、まちと一緒に暮らしていける、人のつながりという実感ができた出来事もあった。これからも盛り上げたい。

(モデレーター 小磯 修二 氏)

- ・人とのつながりは人生の営みの中でも大切なものだが、それを政策にどうつなげていけばいいのか、これからの一つの政策のテーマだろう。

(恵庭市長 原田 裕)

- ・市民力を地域資源として、これからこの総合計画づくりにおいても、政策の展開ということにも大きな力になるのではないか。変化に対応できるようなまちでなければならないし、究極の目的は、そこに住む市民の幸せ、あるいは豊かさ、そういったことである。
- ・計画に書いてある、書いていない別にして、施策を展開していくべきである。

(モデレーター 小磯 修二 氏)

- ・恵庭の持っている市民力は財産である。これからは、市民の力を恵庭の将来の発展に結びつけていく、道しるべといったものをつくり上げていくことが必要、難しいがそこに総合計画の役割があるように思う。
- ・今日は市民がつながり合う力の大切さと、それを力にしていく恵庭の可能性を感じた。

(落合 信也さん(恵み野商店会 会長))

- ・町内会等に幅広く協力することで、今まで解決できなかったものが解決されて、新しいものが生まれたりすることは感じている。
- ・みんなで協力し合うことで新しい形になっていくというか、そういうものができていくのが、目の前のことだが、いいのかなというふうには感じている。

(唯一無二のてつしさん(まちづくりワークショップ委員))

- ・サービス移出産業が人口減少の中で力を入れることだと思っている。夏祭りを毎週開催していることに驚いた。人が分散してしまっていて、市内の人は行きやすいけれども、市外の人がどれに行ってもいいかわからないと言っていて、ぎゅっとして三大イベントぐらいにまとめて展開すれば、観光が増えそうと思った。

(白崎 亜紀子さん(恵庭市民))

- ・この先の10年においても、思ってもいないことが起こる。変化に自分も対応できる形でありたい。市民活動をやってみて、普段は総合計画というのを意識して生活はしたことはなかったが、予算はこれぐらいだったなとか、関心の方向が広がる楽しさもある。これからも楽しんでやっていきたい。

(恵庭市長 原田 裕)

- ・人口減少、消費抑制による心理的な縮小は怖いと思った。稼ぐ力、域内消費の大切さを聞いて、次の総合計画の柱の一つになると考えた。ほとんどが通過する、宿泊しないところであるが、何とか滞留させることに転換する施策が必要になると思っている。盤尻地区を観光という視点で捉えられないか、ふれらんどに人が集まるのが少なくなってきたので、人を呼び込む工夫ができないかということを考えている。具体化しながら弱点の強化、交流人口を増やして、恵庭でお金を落としてもらうことが必要、人が集まればそれに伴う需要が出てくる。企業や市民が新しい事業に展開していくことも考えていきたい。

7. 閉会